The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	放射能汚染、反核運動、被曝者 : 21世紀ヒンディー語小説『マラング・ゴダ ニルカーント フア』を巡って
Author(s)	モインウッディン, モハンマド
Citation	原爆文学研究. 2019, 18, p. 96-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89244
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

放射能汚染、反核運動、被曝者

――21世紀ヒンディー語小説『マラング・ゴダ　ニルカーント　フア』を巡って

モハンマド・モインウッディン

はじめに

論者は、日本における原爆文学研究の長い歴史に敬意を表しつつ、海外の文学による原爆および核への言及に視野を広げることを大きな課題としている。今の段階では、ウラン鉱山、核実験場、原子力発電所などにまつわる世界の文学作品を検討し、そこで見られるヒロシマ・ナガサキの扱い方について考察を行おうと考えている。今回は、インドのウラン鉱山を素材に書かれた長編小説『マラング・ゴダ　ニルカーント　フア』（二〇一二年）を取り上げたい。本作品では、作者が当然のこととしてヒロシマ・ナガサキを放射性物質による被害の出発点としてみている。作者は繰り返しヒロシマ・ナガサキからの例を取り上げ、それをインド東部の地方として描いている「マラング・ゴダ」の放射能汚染問題と繋げようと試みている。まず、この小説の舞台であるインドにおける放射能汚染に対する知識の普及について紹介しよう。

インドのHuman Rights Law Network（ＨＲＬＮ、人権法ネットワーク）は二〇〇六年初めごろ、ウラニウム・放射能についての基本的な知識を一般の人々に伝えようと『ウラニウムと放射能に関する情報の冊子』を英語とヒンディー語で出版した。質疑応答の形式で構成されているこの冊子の中では、ウラニウムや放射能に関する基本的な情報だけではなく、ウラニウムが採鉱から使えるようになるまでの過程を段階に分けて説明している。さらに放射性廃棄物、またそこからの放射能汚染などやそれらの影響についてごく簡単な表現で述べている。この冊子がインド社会ではどの程度理解されたかは調査されていないが、インドで出版された原爆や核に関する小説などの出版物では多く参照されてきた。本稿で取り上げる小説にも、この冊子の強い影響が見られる。

インド、デリーから出版された『マラング・ゴダ　ニルカーント　フア』においては、東インドのジャールカンド州のジャドゥゴダという地方にあるウラン鉱山の地域が舞台となっている。インドのウラン採鉱の歴史、放射性物質による被害などについて描

かれているだけでなく、日本の原爆をはじめアメリカ、オーストラリアなどのウラン鉱山や原子力発電所などにも言及している。そして、ヒロシマ・ナガサキの被爆者とウラン鉱山、原子力発電所事故の被曝者は同等に扱われている。

ヒロシマ・ナガサキの回想は、核の被害を描く海外の文学において、直接核に関する事件であれ、産業災害であれ、頻繁に見られる。例えば、スリーマイル島（一九七九年）、チェルノブイリ（一九八六年）、福島第一原子力発電所事故（二〇一一年）の場合はもちろんのこと、インドのボパール化学工場事故（一九八四年）[1]の場合もウラン採鉱による放射線の問題が発覚した時も、ヒロシマ・ナガサキの原爆や被爆者が繰り返し話題になっていた。七〇年以上たってもヒロシマ・ナガサキは原爆のレガシーを持ち続けているのだろう。一九七四年に詩集『ヒロシマ・未来風景』[2]において、栗原貞子が使った「同心円的連帯」（二二頁）[3]は、大変重要な意味を持ってくる。中村朋子は、「同心円」に関する栗原のイメージを図表化し、ヒロシマ・ナガサキを中心にプルトニウム・ウラン鉱山、核実験場、原子力発電所などから発する放射線の危険性を伝えようとしている[4]。栗原が言う「同心円」は年月が経つにつれて世界各地へ広がっているのではないだろうか。

先行研究と問題の所在

本論に入る前に海外の核にまつわる場所の文学に関する研究の現状について少し触れておきたい。ブルース・ヘヴリィ、ジョン・フィンドレ編、*The Atomic West*, University of Washington Press（『アメリカ西部の原子力問題』一九九八年）においては、一九四二年から一九九二年にかけてのアメリカの核化の歴史と現状について論じられている。これは、一九九二年にワシントン大学で開催された「The Atomic West, 1942-1992 : Federal Power and Regional Development」（アメリカ西部の原子力問題、1942-1992 ：連邦権力と地方の発展）というシンポジウムをまとめた論集である。本書の議論は、トリニティ、ネヴァダ・テストサイトなど「核地域」はもちろん、ウラン鉱山、ウラン製造地、核実験場などにも及んでいる。ケート・ブラウンは *Plutopia: Nuclear Families, Atomic Cities, and the Great Soviet and American Plutonium Disasters*（『プルトピア――核の家族、原子力の諸都市、大ソヴィエトとアメリカのプルトニウム大災害』二〇一三年）において、放射能汚染に覆われたロシアのオゼルスクとアメリカのリッチランド（ワシントン州）を中心に原子力・核の影響について論じている。氏は、豊かな町であった両都市がどのようにして被災地となったかを詳しく検討している。

伊藤詔子は、「序にかえて――核をめぐる言説の日米の共働について」と「核の場所の文学――ハンフォード、ネヴァダ・テストサイト、トリニティへの旅」（熊本早苗、信岡朝子編『核と災害の表象――日米の応答と証言』英宝社、二〇一五年）において、核に関わるアメリカの諸地方を取り上げ、それぞれの土地の核の影響や現状について考察を行っている。氏は、「ハンフォード、ユッカマウンテン、ネヴァダ・テストサイト、トリニティへ」旅し、それぞれの場所の文学、上記の書籍を含め、欧米の多くの文献も紹介している。そして「核の場所に関わる文学は、核以前の世界

を構成していた生きもの一切の喪失を知り、トラウマの風景を地層の底にまで解剖する。」と述べるに至った。松永京子は、アメリカの核文学の研究に従事し、最近『北米先住民作家と〈核文学〉――アポカリプスからサバイバンスへ』（英宝社、二〇一九年）という貴重な研究成果を出している。氏は、「核や原爆による終焉を〈ニュークリア・アポカリプス〉」[5]と呼び、核をめぐる北米の先住民文学について幅広く考察を行っている。

一九四五年の世界初の原爆投下以来、原爆による破壊、核戦争による世界の破滅などに関するイマジネーションをめぐる多くの小説、詩など文学作品が発表され、「ゴジラ」「シン・ゴジラ」のような映画、およびアニメーションなどが世界の注目を引いてきた。近現代の文学の世界では、ジャンルにかかわらず、これほど永きにわたって頻繁に取り上げられてきたテーマは核問題以外にはないだろう。核保有国の間の紛争であれ原発事故であれ、このテーマに関する議論は何度も盛り上がり、その度にヒロシマ・ナガサキが回想されている。

ヒロシマ・ナガサキの原爆投下以降、核兵器が使われなかったことは事実ではあるが、核保有国の数は年々増えていることも事実である。また、原爆が使われなかったと言っても、原発事故、ウラニウム採鉱などによる放射能汚染は世界各地で破壊をもたらしている。つまり、「被爆者」の数は減っているが、「被曝者」は世界各地で増えている。それは、核エネルギーの「平和的な利用」のためなのだろうか。世界は原子力の「平和利用」と言えば問題視しないようだが、二〇一五年ノーベル文学賞を受賞したスベトラーナ・アレクシエービッチの言葉を借りれば、「軍事的原子力とはヒロシマ・ナガサキという意味で、平和的原子力と言えば各部屋に一つの電灯という意味である。軍事的原子力と平和的原子力は実は双子である[6]」。チェルノブイリやフクシマの原発事故から考えてみると、アレクシエービッチが言うごとく「軍事的原子力と平和的原子力」はやはり「双子」である。しかし「軍事的原子力と平和的原子力」両方に必須であるウラニウムによる放射能汚染問題に対しては、核武装についても原発についても何の発言も見られない。ウラニウムの採掘から燃料として処理するまでに排出される放射性物質の影響は、ウラン鉱山の周辺に住んできた先住民たちには多くある。本稿で取り上げる小説において描かれているウラニウムによる被曝者の多くは先住民であり、同様な状況は、松永著『北米先住民作家と〈核文学〉――アポカリプスからサバイバンスへ』において取り上げられた北米作家の文学作品からも窺うことができる。

なお、前述したようにアメリカの核の場所に関わる文学に関する研究は多くみられるが、ヨーロッパの国々やイギリス連邦の場合についてはわずかである。さらにインドとパキスタンについて言えば、ほとんどない。

本稿では、インドのウラン採鉱とその放射能汚染による被害を中心に書かれた文学作品を取り上げて考察を行いたい。この作品における放射能汚染による被害をヒロシマ・ナガサキと比較する妥当性について検討し、核保有国であるインドの社会において持つ意味について探求したい。

作家の創作方法、事実と虚構の問題

作者マフア・マジーは現代インドの先住民作家であり、ヒンディー語の文学者として知られているが、英語、ベンガル語でも短編小説を書いている。彼女は社会学で博士号を取得し、最初の長編小説 *Me Borishailah*（『私がボリシャイッラーである』[7]）を二〇〇六年に発表した。そして、二〇一二年に二番目の長編小説『マラング・ゴダ　ニルカーント　フア』を発表している。氏は、二〇一三年一一月にJharkhand Women's commission（ジャールカンド州女性協会）の会長になり、その一年足らず後、Jharkhand Mukti Morcha（ジャールカンド解放党）という政党に入党した。その後は政治家としても知られるようになっている。マジーはジャールカンド州女性協会の会長を任期満了により二〇一六年一一月で退任した。

二〇〇六年に発表した小説では、バングラデシュの独立運動や社会運動などが主なテーマとなっており、事実に基づいた作品だと言われている。この小説は二〇〇八年に英訳され、イギリス、イタリアなどヨーロッパの大学で現代文学として学部生のシラバスに加えられたことがある。また、二〇一二年の長編小説『マラング・ゴダ　ニルカーント　フア』では、東インドの先住民族（アディヴァシー）による運動や反核運動などが主なテーマとなっている。両長編小説の素材は事実と緊密に関わっているが、フィクションのような形式で語られている。つまり、事実のフィクション化や社会運動を素材としていることなどはマジーの文学の特徴だと言えよう。

長編小説『マラング・ゴダ　ニルカーント　フア』が出版されたのは、インドにおいても国際社会においても核に関して重要な出来事が起こった時期である。インドは二〇〇六年にアメリカと「民生用原子力協力」の協定を結び、二〇〇八年、原子力供給国グループ（ＮＳＧ）から核関連品目の供給を認めてもらっている。そして、全国に原子力発電所を作る計画を立てた。一方、二〇一一年三月に東日本大震災と、それに引き続き福島の原発事故が起こり、核問題が世界的に話題になっている時期であった。このような社会状況のためか、本小説は二〇一二年に出版された後、二〇一五年、二〇一六年と再版されている。この小説の出版部数については出版社に問い合わせたが、返事を得ることができなかった。が、ヒンディー語話者は四億人を超えており、ヒンディー語話者の数とこの小説が再三増刷されたことから考えると、出版部数は確かに少なくはなかったと想像できる。ところが、出版当時は新聞などマスコミにこの小説に関する紹介記事が掲載されていたが、なぜか研究者たちにそれほど注目されなかった。全国に原子力発電所を作ろうとしているインド政府が、コントロールした可能性があるかもしれない。マジーの最初の小説は高く評価され英訳もされたのに対して、この小説は当時の社会状況や世界的に話題になっていた課題と密接に関わっているにもかかわらず、まだ他の言葉に訳されていない。

本作「謝辞」の直前に、「この小説の中で使われた場所、人などの名前は想像によるもので、事実と関係ない。」と記されているが、なぜそのようなことを書く必要があったのだろうか。論者

が見る限り、タイトルも含め人名、地名などは実在のものと全く同じではなくても「事実と関係ない」とは言い難い。例えば、作中の「日本のOto大学の核科学者ボイデ（Boide）教授」（二二二、三二七頁）は京都大学の小出裕章（KOIDE Hiroaki）助教を指しているのではないかと考えられる。「Kyoto」の「Ky」を省くと「Oto」になり、「Koide」の「K」を「B」に置き換えると「Boide」になる。実際に起きた事実はどうかというと、京都大学原子炉実験所の小出裕章助教は「二度現地に行ったことを含め、二〇〇〇年夏以降調査を行って」[8]いる。そして、「マラング・ゴダ」で採鉱反対運動を行っているＭＯＡＲ（Marang'godas Organization Against Radiation)という協会は、実在するＪＯＡＲ（Jharakhandi Organization Against Radiation）から取った略語で、作中、ＪＯＡＲと同じ活動をしている。また、ドキュメンタリー映画の監督アディテヤシュリの名前についても同じ捉え方が見られる。作中シュリ監督として繰り返し記されている。実際は、ドキュメンタリー映画「ブッダの嘆き」の監督シュリプラカッシュのことだろう。「放射線、核兵器、核戦争の反対運動をしている医師の国際協会の副会長」である「オーストラリアの医師」（三五五 - 三五六頁）についても同じ捉え方だろう。この医師は核戦争防止国際医師会議（International Physicians for the Prevention of Nuclear War、IPPNW）の副会長ティルマン・ラフ医師のことだと思われる[9]。そして、タイトルで使われている地名の「マラング・ゴダ」も虚構の地名であるが、前者は「マラングル（Marangurl）」というその地方の先住民たちの大変重要な神の名前の前半、後者は鉱山地「ジャドゥゴダ」の後半部分「ゴダ」である。他の人名、地名などに関してもほとんど同様の創作が見られる。

放射能汚染による先住民の生活の崩壊と国際連携の試み

作中ウラン鉱山で働いている労働者や鉱山地方に住んできた人々は先住民たちであり、ほとんど教育を受けておらず、経済的に非常に遅れている。彼らは、大昔から山々と森林に囲まれて暮らし、動植物と共に生活を送ってきた。彼らが鉱山会社や政府に土地を追われ、生活のために鉱山労働者となったことは繰り返し語られている。そして鉱山の被害を受けながらも三〇年も住民たちは鉱山の影響だと気付かず、農産物の不作や健康状態の悪化に苦しんできた。そして、癌、流産、先天性異常などは悪魔のせいだと信じていた。が、やがて多少教育を受けた若い世代（最初の鉱山労働者の孫）がだんだん放射能汚染の実態を理解し、ウラン鉱山に対する反対運動と補償請求を始めた。また、ある若いジャーナリストがウラン採掘場や鉱滓池周辺、鉱山労働者の健康状態、新生児にまで及ぶ障害などを映像化し、東京で開催された国際的映画祭「地球環境映像祭」においてそれを上映し、世界の注目を引いた。このドキュメンタリー映画は映像祭で大賞を受賞した。このようにして、採鉱が始まってから数十年後、初めてインド東部の放射能汚染を世界が知るようになった。そのドキュメンタリーは世界の注目も引き、国内外の科学者や医学者らが現地を訪ね、放射能汚染の人間や動植物また環境への影響を調査する。海外、特に日本の「Oto大学の核科学者ボイデ教授」（二二二、三二七頁）によって現地で研究調査が行われ、この問題の深刻さは学

術的にも証明された。また、「ウラン鉱山や鉱滓池の近くに住んでいる人々の健康に対する放射能汚染の影響に関するレポートを読んで、オーストラリアからある医師が」（三五五‐三五六頁）現地を訪問する。このように、ウラン採鉱反対運動の指導者とドキュメンタリー映画を作った監督の努力でこの放射能問題は国際組織の取り上げるところとなり、世界的に話題となった。この二人（作中名は、採鉱反対運動の指導者サゲン・ラグリと監督アディテヤシュリ）が『マラング・ゴダ　ニルカーント　フア』の主な登場人物である。

作品の最初の四分の一においては、ウラン鉱山発見の過程から採掘開始にかけての歴史が語られている。そこでは、インド植民地時代のイギリス人による鉱山探しや、インド独立後にウラン鉱山の発見のために努力する技術者・科学者の姿、そして鉱山発見までの過程が、主人公サゲンの祖父ジャンビラの視点から語られている。鉱滓池の建設のためにその場所から退去させられる先住民たちの反応や精神的変化が、数十ページにもわたって描かれている。鉱滓池の危険を知らされていない住民や子供たちが、その「雪のような真っ白」（九二頁）に見える池で遊んだりしている様子（九二頁）や、家畜が池の周りの植物を食べている（九二頁）様子の描写を通して、住民たちの放射能汚染に対する無知や鉱山会社などの隠蔽体質が再三再四指摘されている。

主人公の祖父はウラン鉱山の倉庫で働いていた。彼は、ウラニウムの生産の方法を次のように述べている。「鉱山から掘り出された岩は大きな機械で押しつぶされ、化学物質で洗浄して黄色い粉が分別される。黄色い粉は機械で乾燥し、（私は）数人の労働者と一緒にそれを大きなドラム缶に入れなければならない。その粉がドラム缶にたくさん入るようにドラム缶を揺らし続けるように命令されている。そうすると黄色い粉は飛んで目、鼻、耳、口に入ってしまう。全身に浴びてしまうのだ。（中略）これは大変高価な石、ウラニウムの粉である。」（「高価な黄色い粉と変化していく世界」章、九〇頁）ここから明らかになるように安全は少しも守られておらず、労働者はウラニウムで覆われた服で帰宅し、放射性物質を毎日それぞれの家へ運んでいる。主人公の祖父は皮膚疾患と肺の病気に、後に祖母は癌に掛かり、二人とも亡くなった。また、弟は「全く理解できない病気に掛かってしまい、毎月輸血を受けなければならない」（「未知の恐れ」章、一二〇頁）。父も「結核」に掛かってしまい、「マラング・ゴダ」全体に奇妙な病気が流行っていく。先天性異常や死産も多く見られる。そのような「奇妙な病気に悪魔が関わっている」（「泥棒を切り、悪魔を殺す」章、一二四頁）と住民らは信じていた。何とかして大学を卒業したサゲンは、やはり鉱山労働者である父の勧めにより鉱山会社で電気技術者の訓練を受け始めた。それをきっかけに会社の図書館で勉強し、ウラン採鉱に関する資料を手に入れ、読み始める。彼はウラニウムから出る放射線の危険性を理解し、若い世代の住民を集めて自分のメモを見ながら皆に放射性物質の影響について伝え始めた。「「我々のマラング・ゴダの子供たちに多くの障害が発生しているのはそのためだ。」と聞き手は驚く」（「実際の悪魔が捕まる」章、一五八頁）。

作者は、環境保護団体グリーンピースの活動船レインボー・ウォーリア号が「オーストラリア、ニュージーランド近くの太平洋

の島々に住んできた先住民たちを放射能汚染問題から救うために」（「毒蛇を穴の中に置いておこう」章、一七九頁）活動したことなどの例を挙げる。また、「アメリカのスリーマイル島やウクライナのチェルノブイリの原発事故に関する映画、太平洋の島々の周辺で行われた核実験による被害を取り上げた Dennis O'Rourke の『ハーフ・ライフ』という映画、カナダのウラン鉱山を取り上げてカナダの映画制作庁によって作られた映画『ウラニウム』、日本のヒロシマ・ナガサキの原爆投下を取り上げたいくつかの映画を」（「毒蛇を穴の中に置いておこう」章、一八九頁）反核運動家や「マラング・ゴダ」の住民たちに見せることで、住民たちが考え方を変え、反核運動が強化されていく様子が描かれている。一方、現地の人々が放射能汚染問題の証拠を集めようと鉱滓池周辺の住民たちの健康状態を映像化し、国際的な場でそれを上映することや、主人公その他の登場人物たちがそのような状況を語る場面が注目に値する。このように、「マラング・ゴダ」の人々が国外へ問題を発信することの重要性を理解したことが示唆されている。さらに作者は、「マラング・ゴダ」の放射能汚染問題や権力者側に苦しめられてきた先住民らを、同じ問題に直面している世界の他の先住民たちと連関しようとする。二人の主な登場人物が世界各地を回り、放射能汚染問題に関する集いなどに参加していることも、「マラング・ゴダ」の問題について皆に知らせ、核から被害を受けた人々と繋がる努力としてみることができるだろう。

以上見てきたように、作者はウラン被曝者の無知について語り、採鉱に関わっている会社や政府の無責任さを糾弾している。また、世界各地の核によってもたされた被害者と連帯することで「マラング・ゴダ」の放射能汚染問題にトランスナショナルなイメージを与え、国際社会の注目を引こうとしている。

緑の地から毒の地へ

ここで、この小説の題名が持つ意味や作者の意図について考えてみよう。作者は、作品名を通してその地方の状況を伝えようとしている。作品名の後半部にある「ニルカーント」は大きな意味を持っている。これはヒンドゥー教の三大神の一人シヴァの別名である。ヒンドゥー教の神話によると、乳海攪拌[10]の際海から現れた毒を人間を助けるためにこの神が飲み、自分の首の隅に入れておいた。「Nil」は「毒」の意味で使われ、「Kanth」は首を意味している。つまり、「毒」を「首」に入れて人間を救った神という意味である。この小説の中での鉱山地帯である「マラング・ゴダ」は、実は全国から運ばれて来る放射性物質も自分の鉱滓池で引き受けており、その意味で、インドの他の地方を助けているのである。なお、「フア」とは「～になった」という意味である。つまり、この小説の題名は「マラング・ゴダはニルカーントになった」である。「ニルカーント」を題名に入れた作者の意図を推し量るべきである。

「マラング・ゴダ」と推定される地方は、元々深い森林地帯であり、昼でもなお暗い場所も少なくはなかった。採鉱が始まってから「ウラニウムの七つの採鉱地、一つの工場、三つの鉱滓池」（「天井から落ちる…道や中庭に垂れ流される放射能」章、三五五頁）

が作られ、「毎年、約二〇〇トンのウラニウムの生産のために約三〇万トンの水分を含んだ汚物がパイプで鉱滓池に流されている。」（同章、三六一頁）その結果、放射性物質の影響は人体にはもちろんのこと動植物にも強く現れた。

作中、国内外の核科学者、研究者、医者などの報告が頻繁に引用され、その地方の急を要する非常事態を表すために使われている。ウラン鉱山、工場、鉱滓池から出る放射能で「マラング・ゴダ」の川の「魚は毒になっている。食べると腹が痛くなる。それに、魚の数も最近非常に減っているが、残っているのは異常な姿をしている。頭は大きくなっており、体は細い」（「毒蛇を穴の中に置いておこう」章、一八四頁）。また、「蛇、蛙、サソリがどんどん死んでいる」（同章、一八五頁）。

鉱山労働者でない住民たちにも、放射能中毒の徴候および症状「嘔吐、下痢、吐き気、食欲減少、不快感、頭痛」などが見られる。女性たちは最も深刻な影響を受けている。子供の出生前死亡、出生直後の死亡が多くあり、子供が産まれない女性も増えてきた。「子供を産めないという理由で夫に捨てられている。また、障害のある子供が生まれることを恐れてそこの男女と遠くの村の人々が結婚しない」（「森林の火炎」章、三三八‐三三九頁）。これらの現象はヒロシマ・ナガサキの被爆者が直面してきた差別とあまりにも似ているのではないだろうか。この地方では原爆の投下も原発事故もないが、被害はヒロシマ・ナガサキ、そして、スリーマイル島やチェルノブイリなどの住民が被った被害と共通する。

ヒロシマ・ナガサキのレガシーとインド東部のウラン被曝者

この作品では全体の半分以上（二〇〇ページ以上）にわたってヒロシマ・ナガサキや被爆者に関する言及が見られる。「毒蛇を穴の中に置いておこう」という章においてアディテヤシュリ監督がインドの核科学者との会話で、「日本の広島と長崎に原爆が投下された後も生き残った人々に肺癌、皮膚癌やほかの癌の実例が異常に増えているのが見つかった…」（一八六頁）と言う。隣にいた主人公が「あなたは実に正しい。」と強調し、「ヒロシマ・ナガサキについて読んで初めて私は放射性物質の被害レベルについて理解できた。」（一八六頁）と言う。このように作者はヒロシマ・ナガサキを通して初めて具体的に「マラング・ゴダ」の放射能被害を把握したと推測できる。

さらにこの小説のストーリーを辿ると、「一九九八年五月にインド」、五月の「最後の週にパキスタンも」核実験を行い[11]、世界の注目を引いた。両国の間の対立関係がひどくなり、南アジアでは冷戦時代のような雰囲気となってきた。一九九九年三月一一日から、「世界平和のためにポカランからサラナートの間（約一五〇〇㎞）でデモ行進が行われ」（「ポカランの埃」章、一九九頁）、「サラナートに着くまでの間に（中略）世界の非核化を呼びかけようと一万八千人の署名を集め、世界七ヶ国の核保有国の大使館に行って提出した。」（同章、二〇一頁）この行進にはアメリカ、日本を含め外国からの知識人や社会活動家なども参加した。この機会に、アディテヤシュリ監督が「マラング・ゴダ」の放射能汚

染問題などに関するドキュメンタリー映画を上映し、海外からの参加者たちに特に評価された。「日本から来たマサユキは日本へ持って帰るためにコピーを一枚買った。」（同章、二〇二頁）これは、作中で最初に日本人が登場する場面である。このデモ行進にアメリカを含め世界中から社会活動家らが参加したにもかかわらず、なぜ「日本から来たマサユキ」がそのドキュメンタリー映画を買う必要があったのだろうか。作者は、マサユキを被爆者の子として紹介している。また、マサユキに原爆投下による被害がいかに甚大であり得るかを語らせている。これは「日本から来たマサユキ」にしかできないことであり、ヒロシマ・ナガサキのレガシーの重要性を窺わせているだろう。なお、マサユキの口を借りて語っているのは以下の通りである。

第二次世界大戦の時アメリカは、母国日本に原爆を投下し、その被害を見てから今まで世界中どこにも再び原爆は使われませんでしたが、今印パの核実験で再び核戦争の危険が感じられています。両国の強大な原爆が使われてしまったら、この地球から命がすべて失われてしまいます。（中略）勝利を喜ぶべきインドもパキスタンも残りません。実のところ、その核戦争が勝利に終わったか敗戦に終わったかの結果を見る国さえ残らないかもしれません。（同章、二〇二頁）

今日のものほど強力でない原爆ではありましたが、母国日本は一九四五年に放射能の被害を被りました。被爆者の存在は、今も放射能の影響を我々に思い出させます。（同章、二〇二－二〇三頁）

本論執筆時点では、印パ関係がこの小説が指している時期よりも悪化しており、両国間の核戦争の可能性は世界中のメディアで話題となっている。今ほどに深刻でなかった作品執筆時でも、作者は上記のように日本人マサユキを使って、ひろく読者に原爆がもたらす結果の重大さを伝えようとしている。これはまさに、被爆者の子マサユキならではの役割である。

マサユキはその後も引き続き登場し、主人公と日本を繋ぐ懸け橋となっている。彼の活躍は、アディテヤシュリ監督のドキュメンタリー映画が国際的な場で評価されるきっかけとなっている。マサユキは「マラング・ゴダ」の現状を映像化したドキュメンタリー映画を「東京で開催される国際環境映像祭」（「広がる…空」章、二〇四頁）に参加させるために申請し、それは映画祭での上映に選ばれ大賞を受賞した。この機会を得てアディテヤシュリ監督は東京へ行った。日本の反核運動家の援助で、彼は京都、大阪、名古屋などを回り、「オート大学の有名な核科学者ボイデ教授に会いに行く」（「放射能汚染に関する会談と満開の桜」章、二二一頁）。アディテヤシュリ監督は核科学者「ボイデ教授」に会って「マラング・ゴダ」を訪問するよう頼み、放射能汚染に関する調査を依頼する。「マラング・ゴダ」の問題を日本国内に広く伝えるためにも、またほかの国々へ伝えるためにも、東京で開催された「国際環境映像祭」においてアディテヤシュリ監督のドキュメンタリー映画が上映されたことは大変重要だったと考えられる。

後に、主人公サゲンとアディテヤシュリ監督は「ヒロシマ・

デー」に参加するよう誘われ、二人一緒に来日する。彼らは、広島平和記念資料館と長崎を訪ね、被爆者に会い、「マラング・ゴダ」の被曝者と比較している。二人が広島平和記念資料館で見たものは、次のように描写されている。

溶けた自転車…黒く焼け焦げた食べかけのお弁当…焼けた本…半分顔の溶けた仏像…数えきれないほどの遺物。焼けた人の骸骨などの絵…動物、鳥…植物…（中略）原爆投下の瞬間から同じところで針が止まっている時計、（中略）（これらはみな）全世界に警告を発し続けている。（「人間の思考の悪魔的な産物――核兵器と溶けた仏像」章、二四五頁）

周知の如く上記引用部で描かれたようなものは広島平和記念資料館で展示されているが、作者がこの展示を直接見たかは今の時点で確認できていない。が、このように作者は原爆投下の被害を具体的にインドの読者に伝えようとしており、「このような展示物を見ればどんな敵でも心の底から動揺してしまう。」（二四五頁）と主人公に言わせている。さらに、両者に被爆者との交流なども語らせている。「あの被爆者の悲惨な物語を聞かなかったのか。彼は子供だった時温泉で、体の赤く焼けただれた痕を他の人々が嫌がり、彼が触れた水に触るのでさえ皆嫌がっていた。」（同章、二五二頁）などと互いに話している。

その後も「マラング・ゴダ」と日本の知識人、若い社会活動家の交流が続く。核科学者「ボイデ教授」の調査結果が発表された後、ウラン採鉱会社は放射能汚染の安全規則を守り始める。鉱滓池の周りには高い壁が建てられ、一般の人々の出入りが禁止された。作者は日本の科学者の貢献を次のように述べている。「ボイデ教授がマラング・ゴダに来られたことはサゲン（注：主人公）とアディテヤシュリ（注：監督）にとって大成功であった。なぜならば、氏のおかげで会社は鉱山労働者や住民たちのためになる重要な一歩を踏み出した」（ニテタル（注：ブーゲンビリア属の植物）にも放射線の影響」章、三二九頁）。

以上に見てきたように、ヒロシマ・ナガサキとの繋がりや日本からの核科学者の努力によって、誰からも気付かれていなかった「マラング・ゴダ」の放射能汚染問題は世界中に注目されるようになり、ウラン採鉱会社も安全対策を守らなければならなくなった。ヒロシマ・ナガサキは世界中に原爆投下で知られているが、その存在が反核運動や放射能問題に関する運動などにおいて国際的に大きな意味を持ち、世界平和に貢献し続けているということが、インドを舞台にしたこの作品でよく描かれていると言える。

おわりに

作者はインドの一地方の人々の被曝の苦しみに光を当て、それを小説の形で世の中に紹介した。そうすることによって、政府の文書や科学論文の中にとどまってしまったかも知れない被曝者の苦しみを多くの読者に伝えることに成功した。一般の人々は、学術論文は読まないが、小説は一般の人にも手が届く読みものだからである。

さらに作者は、それを歴史的な文脈の中でヒロシマ・ナガサキ

とうまく結びつけた。インドの一地方の問題をそこだけにとどめず、国際的・歴史的な視野の中でとらえ大きなスケールで描き出したことが、この作品の価値をいっそう高いものにしたと考えられる。

なお、本論序章において述べたように、第二次世界大戦終結後の世界において、核に関する問題ほど継続的に取り上げられているものはないであろう。そしてそこではほとんどの場合、ヒロシマ・ナガサキが回想されたり暗示されたりするのが常である。それは本稿で取り上げた小説の場合も同様である。作中「ヒロシマ・ナガサキについて読んでから初めて私は放射性物質の被害レベルについて理解できた。」（一八六頁）と主人公に語らせている場面だが、これは作者自身の経験が暗示されており、大きな意味を持っている。世界の一般の人々は「Atomic Bomb（原爆）」について知っていても、「ウラニウム」による放射能汚染問題については知らない場合が今日でも多い。日本では当然のように思われるが、ウラニウムによる放射能汚染について外国人に説明する時、「Atomic Bomb（原爆）」を引き合いに出して初めて、ウラニウムによる被害がよく理解されることがある。つまり、「マラング・ゴダ」が直面している放射能汚染問題を現実的にはっきりと理解するために、ヒロシマ・ナガサキは不可欠だったと言えよう。作者は、ヒロシマ・ナガサキを通して「マラング・ゴダ」の被害を見ると同時に被爆の実相の例を取り上げることによって、「マラング・ゴダ」の被曝者の実態や放射能汚染の影響をより分かりやすく世界に伝えることができたと考えられる。ヒロシマ・ナガサキを使わずには、それまでほとんど注目されていなかったウラン鉱山の汚染問題に世界の注意を引くことは容易ではなかったのではないか。ヒロシマ・ナガサキのレガシーは放射能汚染の問題を世界に伝えることができる力を持っていると言えよう。

原爆投下後ほんの数十年のうちに広島と長崎は先進国の大都会として復活、発展し、その土地の人々の努力によって日本や世界の平和運動に貢献し続けている。その一方で、両都市が原爆投下以前の歴史的文化的伝統や価値などによって魅力的な土地であり続けていることについても、世界は知っておくべきではないかと考えられる。

今後の研究では核に関わる文学作品を調査し、各作品の中でヒロシマ・ナガサキをどう扱っているかを探ってみたい。海外の核にまつわる文学、例えば、チェルノブイリの原発事故を取り上げた作品*Chernobyl Prayer: A Chronicle of the Future*（『チェルノブイリの祈り――未来の物語』）と本論に取り上げた小説などを比較検討し、世界の異なる場所の異なる事例から核文学研究の新たな地平を見出したい。

付記

和訳はすべて論者による。マフア・マジー『マラング・ゴダ　ニルカーント　ファ』の引用文は『マラング・ゴダ　ニルカーント　ファ』（二〇一五年版）（インド、デリー、ラージ・カマル出版）に拠る。

注

1　中央インドのボパールでは、一九八四年にユニオンカーバイド・インディア（ＵＣＩＬ）の工場でガス漏れ事件が起きた。この事件

は世界最悪の産業災害とも言われている。この事件をきっかけに、*Bharat ka Hiroshima: Bhopal Gas Trasdi*（『インドのヒロシマ――ボパールガス災害』(The Hiroshima of India: Bhopal Gas Tragedy by Satish Chaturvedi, 2005)のような小説も出版され、欧米の記者から *Bhopal: The Hiroshima of the Chemical Industry*（「ボパール：化学産業のヒロシマ」、Billy Briggs,『The Scotland Sunday Herald』, 2009.7.12）のような記事も近年出版されている。また、広島の原爆記念碑のような記念碑をガス被害者のために建てることも計画されている（"Hiroshima-like memorial for Bhopal gas tragedy victims"（「ボパールガス被害者のためのヒロシマのような記念碑を計画」）、"Hindustan Times", 2016.10.17）。

2　栗原貞子著『ヒロシマ・未来風景』(詩集刊行の会、一九七四年)。

3　原爆文献で「同心円」のイメージが使われた例を二点紹介したい。秋月辰一郎著『死の同心円――長崎被爆医師の記録』(講談社、一九七二）と栗原貞子『ヒロシマ・未来風景』。前者は、被爆者の急性放射線障害による死が爆心地から同心円上に広がっていくことを意味した。後者は、栗原貞子の詩集で、同じ核の被害者であるビキニや沖縄・岩国の核基地に寄せた四編の詩をまとめて「同心円」としている。(中村朋子「A Japanese Poet in the Nuclear Age: Sadako Kurihara」(M.S.Venkataramaiah, ed. Bizz Buzz. Bangalore, India, Vol.17 (2014, pp.76-79)。

4　二〇一四年三月に世界詩人会議での口頭発表（中村朋子 A Japanese and an American Poet in the Nuclear Age: Sadako Kurihara & David Kreiger, 23rd World Congress of Poets Osaka, March 26, 2014)。

5　松永京子『北米先住民作家と〈核文学〉――アポカリプスからサバイバンスへ』(英宝社、二〇一九年、四頁)。

6　Svetlana Alexievich, *Chernobyl Prayer: A Chronicle of the Future*（原文はロシア語で一九九七年に出版)英訳 Anna Gunin and Arch Tait, Penguin Classics 2016, p.30 より。(本稿での英訳からの和訳は論者による。〔『チェルノブイリの祈り――未来の物語』松本妙子訳は一九九八年、岩波書店より刊行された〈二〇一一年岩波現代文庫として出版〉。この和訳においてはこの引用文は見られない)。

7　バングラデシュ南部にある「バリサル」という地方を指す。

8　小出裕章「インド、ジャドゥゴダ・ウラン鉱山の放射能汚染と課題」(「原子力資料情報室通信」353号　二〇〇三年一一月一日　二頁)

9　作品の謝辞にティルマン・ラフ医師（ＩＰＰＮＷ副会長）に対する感謝が述べられている。

10　https://ja.wikipedia.org/wiki/乳海攪拌（二〇一九年一一月七日閲覧）

11　現実にはインドが五月一一、一三日に西部のラジャスタン州のポカラン砂漠で計五回の地下核実験を実施し、パキスタンが五月二八、三〇日に西部のバルチスタン州チャガイ丘陵で計六回の地下核実験を行った。